

\*

アベという男のことを、書こう。

この男は、ラップ吹きだった。なんでも高校に入りたてのころ、たまたま暇つぶしに溜まっていた Jazz 喫茶で流れてきた Erik Dolphy に、何と世の中には深い音を出す奴がいるのかと驚き、11ヶ月に自分も同じ alto を演ることに決めたのだという。それから3年というもの、毎日欠かさず練習して、二十歳のころはすでに一家をなしていた。(Saxophone というのは、3年のあいだ一心に修行すると、ちゃんとフルで通用するのだそうだ。)

1969年の後半に、はじめて顔を含ませたのだと思う。この年の暮れ、わたしの劇団は渋谷の Jean Jean で "Kyrie" という出しものをかけた。アベはこのころ自分のトリオをやっていて、彼らをゲストにこの演目か組まれたのである。彼は自分では別に芝居をやるわけでもなかったが、alto を持たせると信じられなくらいに雑弁になった。以来、助っ人としてことあるごとに顔をみせ、劇団の音楽顧問といったかたちになった。

小柄で猫首で童顔で、しじゅう蒼い顔をしていてぶだんは不愛想で口数も少ないも111とこで、おまけに川崎出身のせいかひどい喘息の持病に苦しめられていて。この男をみるたびいつも、裏通りをほつき歩く野良猫か、暗殺の機会を狙うテロリストをなぜか想った。じっさい彼は、奇態な天才幻想か天折幻想にとり透かされていたに相違ない。自信たっぷりといった様子の言辭のはしはしゃポーズに、それがあらわれている。こんなにつきあひづらひ男も、そうたんとはいないだろう。だかられたし、必要以上に個人的な口をきくということもなかった。

アベの演奏はもう、掛け値なしに過激なものだった。(Jazzには詳しくないけれども) 言うなれば、Coltrane をさらに小刻みにしたような sheets of notes の奔流が、聴く者の耳を圧倒した。並みの奏者なら、口のとこるまゝが体でそこから先は手にもってける楽器、という感じになる。ところがアベの場合は、

## 阿部 薫 彗星パルティータ



TRIO RECORDS

PA-6137~38 ¥4000

セリーヌとボリス・ヴィアン、そして阿部薫。ずっと気になり続けていたのは、この三人だった。ぼくが阿部薫の音を最初に聞いたのは、レコードだが、それはレコードというより音のカラーギャムという点で、マックス・エルンストの仕事をはじめて見たときの目まに似ていた。阿部薫という人物に関しては、ほとんど知らない。錢不いつみ女史が、「あの人は勿論、天才なので、エタ」と、何かの語の如に全く当然の言葉のように語るのを聞いたときも、「ハエ」としか思わなかった。人伝で聞くエピソードも、興味がなければなかったが、しよせんそれは通りすましていた人の足あとに過ぎない。ぼくにこの阿部薫は、セリーヌやボリス・ヴィアンと同様、形になって残されたものだけによって成立している存在である。

ぼくは彼の音を、深夜、音を大きくして聞くのが好きだ。おそらく近所の人達はぼくの部屋で、何十羽かのニワトリがイタチに連れかたられてはいるのとはなにかと想像しているにちがいない。

阿部薫の音は悲痛なところもあるけれども、がらして明るい。しばしば微笑を誘うようなところも少なくなく、その辺が可憐な魅力的だ。こんな音を出す人間は、決して長く生きられないだろう、と、いつも思っていた。絶望の虚妄なことを希望に同じい、といった中国人の言葉を、彼の音は思ひ出させる。こんな音楽をやる人間は、世界にもそうはいないだろう。これから先、ぼくらの時代が、まぶしくなくすしの死>へ向けて急速度に滑落してゆきつつある予感の中で、阿部薫の音は、ますます強く魅力的なものとなってゆく。少くともぼく自身にと、それはどうだ。

——— 五木 寛之

Saxが口からはえていて、ラップの先に本当の口があるように見えたのだからたいしたものだと思う。ただ、湿っぽい「泣き」がともすれば音の連続を中断するのは、どうにももうひとつ気にくわなかったのだが。喧嘩っばやいせいか人柄のゆえか、何人かともまってバンドを組むよりは一匹狼のソロイストとして、各地のスポットを渡り歩くというのが日常だった。熱心なファンの友人

阿部さん、と呼んでたのは。初めて会ったのが何処だったか思い出さなかったけど、竹田ケンチのうちは正月だったか兵馬つたときに、「24時間 365日、ライブをやるべきだ」といってた。きっと『更替』の後だ、『芸芸団』の総括の集まりだったのかもしれない。当時のボクは、そんなのは革命的ロマンで兵士にも生活があるのだ、などと言って一笑に付すこともなく、「踊海辺の倉庫がいいですかね」などと言った。阿部さんのサクソを吹く<sup>Mr. Van</sup>熱情はロマンを超えていたが、あの『会話』はいただけない……そう思っています。

————— 坂本 龍一

70年頃だったろうか、ニューマヤズ・ホールで彼を初めて聴いて以来、特別熱心に彼を追ったわけではなかったが、最後にディレク・ベイリーとの共演と聴くまで、ぼくが行くたびに阿部が演奏していたということが何度かあった。彼の訃報を知った時、とっさに「天才の悲劇」と思ってしまったが、ぼくにとっては、「音さえ出せばよい」という感じで無雑作にスニーカーをひっかけたステージに立ち、その姿がたまらない魅力だった。

————— 殿山 泰司

1970年、私が上京してきた時、東京は既に阿部を見送るさうして眠っていた。どの街も、どの店も、どの路上も、眠っていた。田舎者の私は、「戦いは終わったのだ」と思ったが、最初から戦いなどなかったのに違いない。そんなある日、池袋の「ジャズバンド」で、阿部薫のアルトサクソを聞いた。

唯一の新野だった。フリージャズを知らなかったわけではない。佐世保をひとりの洗礼は受けていた。阿部薫の天才には何が詰まっていたのだろう。あの分厚い胸には確かに何か話まわっていて、それを吐き出さずにはいられないというように彼は吹いていた。「花嫁人形」の旋律がぎれぎれに、切り刻まれたような音で聞こえてきた時、この演奏家は死ぬ覚悟なのだ、と思った。

かかレコードの吹きこみなどという下らぬことはおまへに適わしくなない。とたきつけたこともあって、ほとんどもともな録音をのこしてはいない。(とくに「最盛期」のものは全然ない。) 完全癖や受らざる受難や理が邪魔をしたのかもかもしれない。でもたしかに、彼こそ自分のやるimprovisation(即興)とあらゆる種類のrewardとの絶対的な非和解について、いちばん考えつめてはいたのである。

ジャズバンドには二日置行って、八時間くらい聞いたが、それだけ私の阿部薫体験のすべてである。

そして、阿部薫は戦死してしまった。私の周囲は十年前と何ら変わるどころがない、あの日の阿部薫は依然として、「唯一の衝撃」である。今でも阿部薫の音は、私の中で、眠りこけた街をナイフと稱えた一種のパンクロッカーのようなものとして、ある。

————— 村上 龍

……(前略)……

ツアードなどで一緒に海辺を歩いていても、彼一人、海を泳いで向う岸に悠々生回りし、防波堤から手を振っている。彼は生粋のソリストだった。そして音楽家の不可能性をそのまま生きていたふうだ。

こんな時代では、ジャズメンは、長生きしなければならぬ。この前 ABE 豊星は、あつとつ間に飛び去った。我々は、ちゅと固くならい、泡一杯喰いながら、そのうちいかなる天体で遭遇かと、てぐすねひいて待つている。

————— 山下 洋輔

あんな素直な奴はいなかったんだ。もう少し早く出会えたら、あいつを死なせずにすんだという自負を、俺は、今も持っている。俺などで死ぬのはいかん! 人間の弱さ尻出しじゃないか。とにかく渡った。出会うのが遅かったんだ。

————— 若松 孝二

■以上、本年春発売の2枚組LP『豊星マルチータ』のジャケット裏から、抄録しました。なお他に、ALM レコードより2枚組ソロLP『なしくおしの死』(AL8~9、¥4000-)、和リドル(株)より、Derek Bailey と共演の『Duo & Trio Improvisation』(MKF-1034、¥2500)、などがあります。■

ところでふとした事情から、一時期アベと少しは密に接触することになった。1974年の何ヶ月かのことと思う。このころ彼は、元女優でもの書きとして有名な売れた鈴木ハジメさんという人と住むようになった。その引越しをトラックで手伝ったりもした。ハジメさんは思い通りのよい人で、「痛み」ということについてアベと議論するうち、自説を「実証」するため台所から庖丁をもちだ

し片足の小指の先を斬りおとしてしまった。週刊誌の見出しにもなったのだが、そのあと暫くして読み返してみたら、成程小指がなかった。ちょうどそのころわたしは Chomsky を読みかじっていたので、improvisation, a phrasing の生球文法理論との関係についてひとしきりアベと議論になったが、どっぴやあつことび二人できた彼女のいわく、面白ハから仕事もしないでずっと隣りできてたのよ、という。そしてオムレツを作って御馳走してくれた。アベは向かにかこつけの用事と頼み、どうもわたしをマネージャーか向かに仕立てたか、たらしいが、むろんわたしがまともにとりあうわけもない。free jazz がきびしい時代をむかえ、彼も鳥、211たものとみえる。その夏後楽園ホールで、「単楽隊」というバンドの複上げを試みたのだから、これはどうみても手ひびき失敗であった。この頃からわたしはヤ、つまあいがぬるという感じになり、別な事情の然らしめるところもあり絶交を余儀なくされたのである。

最後に容をみたのは、1978年6月、Derek Baileyとのライブを渋谷で演じていたときだろう。そのあとのヶ月もしないうちに、アベは事故であの世へ行ってしまった。

アベという男との行きがかりは、わずかにこれだけのことである。とりたてて友人とよべるほどの間柄でもなかったし。隣人にしても、ちょっと願ひさげというタイフの人間だ。嫌だな、と思うところもある。でもやはり、アベは見上げた奴だ。天才じゃなかったのかもしれないが、向も死ぬことなんかなかった。(多分、天才じゃないと信じさせられてしまうことがアベにはいちばんたえられないことだったのか、しらないが。)とにかくアベは本気で、ある尋常ならざる企みせ加担していた。そういう大それたたぐいの男がいると知れるだけでも、ひとは任せを感謝しなければならぬ。空間という事についてならわたしもいろいろ体験からしることができたつもりだが、こと"音"に関していうなら、いまにして思えば、直接・間接にアベからえたものが少なくないような気がする。

象徴的に言えば、'70年初にひとりの男が死にたいだ生きさまをさらしたので、それにひきつづく10年かそれ以上がかようにも生きのびる音どもの時代となってしまった。なにか目ぼしい出来事でもあったかぬ? たあいもやくだいもなロックとか耳ざわりだけとりえのフュージョンだとか、もうどうしよ

### 短評

「生命科学と女性の権利」は、たしかん利溥的・野心的な論文ですが、いろいろ考えてみると、具体的な疑問がいくつか生じてきます。

まず、体外発生技術が、人類の文明にとって、真に有効なものであるのか——そんなにもいいもので、そんなに簡単に(採悟空の鼠毛!)ゆくのか?——どうか、わかりかねます。(素人考えですが)、子宮にまさるとも劣らぬ胎児の生育環境を人工的につくとすれば、医学的にもひじょうに複雑かつ微妙なコントロールが必要になるだろうし、拒否反応や畸型の懸念もあるだろうし、母乳に含まれている免疫なども、別のかたちで与えなければならぬだろうし……、といったような医学的な安全性、経済性の検討、またどうして生れてきた新生児が、自然出産の新生児に比べて、知的・身体的に遜色のない発言をしてゆくかどうか、についての発達生理学・心理学の統計的検討などが、体外発生が支配的な形態となった社会では、精緻になされなければならぬでしょう。

ただ、新生児をつくら(産んだ)というだけでは、たしか自慢にはならぬのであって、それを、一人の社会的人間に育ててゆくことが、人間の文化・社会の基本的な要件なのです。育児という事は、ある程度の自然への従属があつてはじめてできることだと思ふのです。育児をする感性と、体外発生によって子をもうけようとする感性とは、簡単につながらないのではないのでしょうか。(親)の望むときに、自分の望む遺伝的形質をもった子を偶たとしても、自分の思い通りに育てるとは、加論限りません。\*

もないばさまな自閉が繁殖してゆき。聴きたい音しか出させない、出せる音しか聴かせない、という商品化手続きの丹環。ひとは音をもつてたちむかう戦略を衰くし、音はただの環境になり下つた。ファッションだけが生きのびる。こんな非道い空気のなかでも、アベの音は、出来事として伝わった。だから、殆ど無名であつたにも拘わらず、聴く耳といえるほどの耳にはたしかにとどいたという形跡がある。

こうして、彼は去り、われわれの前には彼のplayのまったく不完全なrecordがあるきりだ。が、文句を言うにはあたるまい。そんな筋色ハかど二にあるう。(肝心なときには他処を向いていたくせに、いまこゝろを言ひだすのか。)このrecordの欠如は、ひとえにわれわれの側にその責任があると考えたほうがよ

\* 親馬鹿とか、「出来の悪いほど可愛い」という愛情は、愛べないかけがえのなさに、また、自らが、子を世に送り出した、という責任感にもとづいているのですが、そのかけがえのなさと責任が希薄にはいば、愛情も変質するはず  
です。大多数の平凡な人間にとっては

先進国では、子供の数が減少しつつあり、西ドイツでは出生率の低下が社会問題となっているようですが、子供をほしからない感性が、(個人だけでなく社会的感性が)ライフサイエンスのこのような発展と、どこかで、むすびついているように思われます。

先日、アメリカの代理母のインタビューを新聞で読みましたが、わたしは、彼女がひじょうに愛情豊かな人であるのか、ひじょうに敏感な人なのか、判断できません。健康・正常な妊娠・出産以上のことも、ライフ・サイエンスはなし得るのか、わたしには、産む性としての自然過程を積極的に肯定したうえで、そのために女性が社会の裏側に押しやられたり、人生を変質させられたりする事のないような、可望的な社会構造、産む性としての自然をにならぬ人間として連続的な人生をからとるための女性の柔軟な努力と挑戦が、何よりも大切なことのように思われます。(自戒!)

1981. 3. 31

—— 三宅 愛子  
(旧姓・山田)

11。そして彼の不在についても同様にも。嘆いてはじまるま11、彼は十分によくやったのだ。あとはあなたやわたしの番だ、と思う以外に、もはやことばはない。

\*\*

今号には、三宅愛子さんから、一昨年『女性の社会問題研究報告』第3集に載った私の「生命科学と女性の権利」に対するコメントを寄せていただいた。はじめ私信に添書きされてあったのを、こちらからお願いしてわざわざ書き直していただいたものなのに、二人共に発表が遅くなってしまった。三宅さんに心からのお礼と、そしてお詫びを申しあげたい。

前号に記して以来、新たに領けられるようになったものは、ほぼつきのとおり:

- CN 108 『売春のどこが悪い』(『女性の社会問題研究報告』第4集:24-53. ¥600.-)
- CN 109 『大洋州の交換経済』(¥75.-)
- CN 110 『サモアの交換経済 — 作業ノート 2 —』(¥55.-)
- CN 112 『数理統計入門』(¥110.-)
- CN 113 『機能要件と構造変動仮説 — 構造-機能分析の identity crisis —』(志田基与郎, 恒松直幸 & 共著, 『ソシオロギス』5:152-168. ¥900.-)
- CN 114 『社会(科)学における標準的な文献挙示方式の提案』(『ソシオロギス』5:92-101. ¥900.-)
- CN 115 『『ツイゴイネルワイゼン』: 知の隠蔽』(¥40.-) (『月刊イメージフォーラム』2-8:80-88.)
- CN 116 『『ツイゴイネルワイゼン』を解く』(¥240.-)
- CN 118 『第4章 最も一般的な構造-機能理論』(¥120.-)
- CN 119 『法の記号論Ⅷ』(¥50.-) (『記号学研究』1:95-106. 北斗出版)

CN 113 のその内容の一部の骨子を発表した『構造-機能理論: 文法の解明』(仮題)という著作を、志田基与郎・恒松直幸両氏と共同で準備中である。近くわたしの担当分の草稿を(CN 118 を含め)まとめておとどけできると思う。これは、"記号空間論"とは一応別系列の仕事なので、"記号空間論"関連のコピーを指定しておられる方々の場合は、別途請求いただけるように。

CN 116, CN 119 にまつわる余談もあるのだが、今回は見送りにするでしょう。なお、阿部 薫の『彗星パルティータ』。レコード店頭にみつからない場合は、わたしに仰告してください、取り寄せることができると思う。

HASHIZUME, Daisaburo : 5-9-11, Zaimokuza, Kamakura 248 JAPAN  
Phone 0467-22-1030 YOKOHAMA 51782 CN 129 ¥20.-/8 pages